宝唱『名僧伝』に見られる 「師」・「苦節」の区別について

李 尚 曄

1. はじめに 梁・宝唱の『名僧伝』については、六朝仏教史の理解に不可欠な資料として、東大寺の宗性による三種の抄本（通称『名僧伝抄』¹⁾）に基づく様々な研究が進められている。しかし『名僧伝』の編集体系の主な特徴である、僧伝の「師」と「苦節」への二分法に関しては、未だ充分な論議がなされていない。本稿はこの「師」と「苦節」の二分法が、当代の世俗社会の「士庶区別」に相応する、仏教僧団内の二層的身分意識の反映であった可能性を提起する。

2. 「師」と「苦節」の二分法 『名僧伝』の篇名を並べると次のようになる。

- (1) 外国法師 (2) 神通弘教外国法師 (3) 高行中国法師 (4) 隱通中国法師 (5) 中国法師
(6) 律師 (7) 外国禪師 (8) 中国禪師 (9) 神力 (10) 兼学苦節 (11) 感通苦節 (12) 遺身苦節 (13) 守素苦節 (14) 尋法出經苦節 (15) 造經像苦節 (16) 造塔寺苦節 (17) 導師
(18) 經師

これから分かるように、『名僧伝』の18個の篇から「神力」を除いた17個の篇は、その全てが「師」または「苦節」という二つの僧侶類型を更に細分化した結果と見ることができる。このような僧伝の二分法の意味に対しての仮説はこれまで提出されていないが、これは『名僧伝』に収録されていた425篇の僧伝の中でその内容が確認できるのは宗性によって筆写された37篇に過ぎないということとも関係があるだろう。しかし、『名僧伝』に伝記が収録されていた僧侶たちを梁・慧皎の『高僧伝』の中から特定した既存の研究成果を踏まえて²⁾『名僧伝』で「師」に分類された僧侶たちと「苦節」に分類された僧侶たちの『高僧伝』の伝記の内容を比較してみると、興味深いパターンが浮かび上がる。

3. 『高僧伝』に基づく「師」と「苦節」の比較 『名僧伝』で正伝を持つ425名の僧侶のなかで『高僧伝』でも正伝が確かめられるのは222名である。『名僧伝』と『高僧伝』両方に正伝を持つこの222名の僧侶の『名僧伝』での分類を確認してみると、150名は「師」に、60名は「苦節」に分類されていて、残りの12名は

「神力」篇に属していることが分かる。このような150名の「師」僧侶の『高僧伝』伝記と、60名の「苦節」僧侶の『高僧伝』伝記を比べてみると次の四点が注目される³⁾。

まず士族出身の僧侶は皆「師」として分類されていることが確かめられる。検討の対象となった210篇の『高僧伝』伝記の中では次のように僧侶の出身が士族であったことに触れる伝記が19篇見出されるが、いずれも『名僧伝』で「師」に分類されている僧侶のものである。

竺潜、字法深、姓王、瑯琊人。晋丞相武昌郡公敦之弟也。(T50, 347c12-13)

釈法安、姓畢、東平人。魏司隸校尉軌之後也。(T50, 380a10)

続いて弟子集団の有無において「師」と「苦節」の間に大きな違いが確認される。即ち、弟子或いは信奉者の集団の存在を暗示する次のような記述が発見されるのは主に「師」の伝記である。

晋興寧中、更還江左。憩于始寧之保山。受業弟子常有百余。(T50, 350c21-22)

璩既学兼内外、又律行無疵、道俗歸依、車軌相接。(T50, 401b4-5)

具体的には、「師」の場合、伝記の41% (61/150名) がその僧侶の弟子・信奉者集団について記述しているが、「苦節」の伝記では僅か7% (4/60名) だけがこのような記録を持っている。

また、皇族の支援の有無にも両グループには格差が存在する。これは「皇族」を、漢・魏・西晋と南朝の呉・東晋・宋・齊・梁及び北朝の後趙・前秦・後秦・北魏の皇帝・皇后・皇子・皇女として定義して、彼らの経済的支援や宗教的敬慕、または彼らとのある種の取引を述べている次のような記録を数えた結果である。

晋孝武致書遺、魏主拓跋珪亦送書致物。(T50, 354b18-19)

彭城王義康、儀同蕭思話等、並從受戒法、筵請設齋。(T50, 370c19-20)

詳しくいうと、「師」の伝記の58% (87/150名) でこのような記述が発見される一方、「苦節」の伝記では18% (11/60名) だけで確認できる。

以上の三点は僧侶の高い社会的地位を示す記録が「師」の伝記に集中していることを意味する。他方、低い社会的背景を表す記録として、僧侶の出身地に関する情報が伝わっていないことを語る次のような表現が挙げられる。

釈慧安、未詳何許人。(T50, 370a19)

このような記述は、前の三種の記述とは反対に、「師」伝記の8% (12/150名) のみで、そして「苦節」伝記ではより多い22% (13/50名) で確かめられる。

4. 六朝僧団の二層的身分意識 以上の論議をまとめると、「師」は元々士族出身であったため、または出家の後僧団の中で高い地位につけたため、皇族との交流や弟子集団の養成等ができたエリート僧侶を意味し、「苦節」は庶人或いは下層階級の出身であって、僧団上層部の活動に参加するのが容易でなかった平民的な僧侶を指す言葉だった可能性が浮かび上がる。

六朝時代の仏教僧団の二層的身分意識を表すもう一つの資料として402年に「衆僧沙汰」の案件をめぐる東晋の実権者桓玄と廬山慧遠の間を往来した書簡が挙げられる⁴⁾。ここで桓玄は「賦役を避けて」僧団に加わった者を追い出すという名分を立てて、「能申述経誥暢説義理者」・「禁行修整奉戒無虧恒為阿練者」・「山居養志不營流俗者」を除く全ての僧侶を還俗させることを提案しているが、この三種類の僧侶は各々「法師」・「律師」・「禪師」という「師」の代表的な類型と合致する。これに対して慧遠は「誦経諷詠不絶而不能暢説義理者」・「興福之人内不毀禁而迹非阿練者」等の存在を挙げて桓玄の提案の厳しさを批判しているが、ここで触れられている「誦経」と「興福」は『名僧伝』で「苦節」に分類されている僧侶の代表的な専修である。これは、『高僧伝』で「誦経」篇と「興福」篇に入っている僧侶の中で『名僧伝』にも正伝がある28名の僧侶が、「齊上定林寺釈道崇」一人を除くと、皆『名僧伝』の様々な「苦節」篇に分類されていることから確かめられる。つまり、桓玄の提案は、「師」、即ちエリート僧侶だけを僧団に残す計画であったわけで、これに対して慧遠は例え「苦節」、即ち地位の低い凡庸な僧侶であっても彼らなりの宗教的役割を果たしていることを指摘したのだと見ることができる。

5. おわりに 紙面の制約につき詳述はできないが、「師」と「苦節」の間にはここで挙げられた以外にも様々なパターンが存在する。例えば「著述」・「講義」等の学術的活動は「師」の伝記に集中している一方、「遺身」・「苦行」・「仏菩薩信仰」等の宗教的修行は「苦節」の伝記にいっそう頻繁に現れる。今後これらパターンの研究によって、六朝仏教と僧団のより立体的な理解ができるようになると思う。最後に何故『名僧伝』で「神力」篇は「師」・「苦節」のいずれにも分類されていないのかという問題があるが、これはこの篇に纏められている所謂「神異僧」が、そもそも既成の「僧団」に属していない流浪僧であって、「師」と「苦節」の区別に縛られない存在として認識されていたからだと考えられる。

1) 『名僧伝抄』と名付けられている続藏經のテキストは東大寺図書館所蔵の『名僧伝指示抄』（函号113番号117）『名僧伝要文抄』（函号113番号118）『弥勒如来感應抄』（函号113番号76及び77）の一部を合わせたものであるが、この版本には多様な問題がある。春日（1936）、Lee（2020、122–124）、定源（2021）を参考。

2) 山内（1921、1–41）、Lee（2020、105–107；126–168）を参考。

3) ここで扱っている四つの属性が発見される僧侶は次のようである。「士」は士族出身、「皇」は皇族支援、「弟」は弟子集団の存在、「未」は「未詳何人」等の表現の存在を意味する。また例えば「5.2」は『高僧伝』巻第五の2番目の伝記を意味する。「師」僧侶の属性：1.1 皇 1.2 皇弟 1.6 皇 1.8 弟 1.9 士弟 1.12 皇 1.15 皇弟 2.1 皇弟 2.2 皇 2.3 皇 2.4 弟 2.5 皇 2.6 皇弟 2.7 皇弟 3.7 皇弟 3.8 皇弟 3.9 皇弟 3.11 皇弟 3.12 皇弟 4.3 弟 4.4 弟 4.5 弟 4.6 未 4.7 士皇弟 4.8 皇弟 4.10 皇未 4.12 弟未 4.13 皇弟未 4.14 士 5.1 士皇弟 5.2 皇弟 5.3 皇弟 5.4 皇弟 5.6 弟 5.7 弟未 5.9 弟未 5.11 未 5.13 皇 5.14 皇弟 6.1 士皇弟 6.2 士 6.8 士皇 6.9 皇弟 6.10 皇未 6.11 皇弟 6.12 皇 6.13 皇 7.1 士皇弟 7.2 皇 7.3 士皇 7.4 皇弟 7.5 皇 7.7 皇 7.10 士 7.13 皇弟 7.14 弟未 7.15 皇 7.16 士 7.17 皇弟 7.21 弟未 7.23 士皇弟 7.24 皇弟 7.25 弟 7.26 皇弟 7.27 士皇 7.28 皇弟 7.30 皇弟 7.31 皇 7.32 皇 8.1 士 8.2 皇弟 8.3 弟 8.4 皇弟 8.5 皇 8.6 皇 8.7 皇弟 8.8 士皇 8.9 皇 8.10 皇 8.12 士皇弟 8.13 皇弟 8.14 皇 8.15 皇 8.16 皇 8.17 士皇 8.18 皇弟 9.1 皇弟 11.2 弟未 11.3 弟 11.8 皇弟 11.14 皇弟 11.19 士 皇 11.20 皇 11.22 弟 11.23 弟 11.25 皇 弟 11.27 皇 11.29 弟 未 11.31 皇 11.32 弟 11.33 士 皇 13.16 皇 13.21 皇 13.22 皇 13.23 皇 13.25 皇 弟 13.26 皇 13.27 皇 13.28 皇 13.29 皇 13.30 皇 13.32 皇 13.33 皇 13.35 皇。「苦節」僧侶の属性：5.12 皇 5.15 弟 6.3 弟 6.4 未 6.5 未 7.12 弟未 7.18 皇 8.19 皇 11.4 未 11.9 皇 未 11.12 未 12.1 未 12.5 皇 12.6 未 12.8 皇 12.12 未 12.14 未 12.22 皇 12.23 皇 未 13.3 未 13.8 皇未 13.10 弟 13.12 皇 13.34 皇。

4) 『弘明集』。T52、85a22–b20。

〈参考文献〉

Lee, Sangyop. 2020. "The Invention of the 'Eminent Monk': Understanding the Biographical Craft of the *Gaoseng zhuan* through the *Mingseng zhuan*." *T'oung Pao* 106(1): 87–170.

春日禮智 1936 「浄土教資料としての名僧伝指示抄要文抄並に弥勒如来感應抄第四所引の名僧伝に就いて」『宗学研究』12: 59–61.

定源 2021 「關於『続藏經』的底本問題——以『名僧伝抄』為例——」『佛光学報』7(1): 157–188.

山内晋卿 1921 「高僧伝の研究」『支那佛教史之研究』佛教大学叢書4、佛教大学出版部、1–41.

〈キーワード〉『名僧伝』、『高僧伝』、六朝、僧团史、宝唱、慧遠

（スタンフォード大学大学院）